

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## <講演>消えてゆく小さな島のことば

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ペラール, トマ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000892">https://doi.org/10.15084/00000892</a>

## 消えてゆく

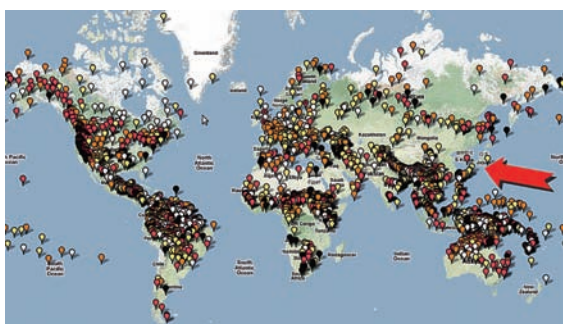
## 小さな島のことば

トマ・ペラール

Thomas Pellard (日本学術振興会外国人特別研究員)

日本学術振興会外国人特別研究員のトマ・ペラールと申します。今日は私が研究している大神島の言葉を中心に「消えてゆく小さな島のことば」の話をさせていただきます。

## 世界のことばの危機



ユネスコによる世界の危機言語

世界の中に6千または7千の言語があるとされていますが、百年以内にその半分が完全に消滅することが予想されています。日本も例外ではなく、標準日本語はおそらく生き残るでしょうが、アイヌ語や各地のことばは消滅を目前としています。

それがなぜ重要な問題なのでしょう。まず、ことばはその地域にしかない伝統文化の一部で、非常に重要な文

化財です。その地域だけではなく、全人類の世界遺産でもあります。また、言語は人のアイデンティティに深く関わっているのです。最近、国際法で人権の一つとして「言語権」が認められつつあります。言語を自由に選択し、次世代へ継承し、さらに立法・行政・教育・メディアで使用する権利のことです。

私が専門としている言語学にとっても、ことばの多様性が非常に重要です。よく知られている標準日本語や英語やフランス語のようなメジャーなことばだけを基にして、人間のことがどうなっているかを論じるのは危険です。まだ研究されていない小さなことばに、誰も想定しない未知の現象がある可能性があります。また、私はことばの歴史に非常に興味がありますが、「周辺的」な地域のことばに中央方言では消えてしまった古い特徴がよく残ることが確認されています。

## 日本の危機言語と方言

二〇〇九年にユネスコ(国連教育科学文化機関)が日本に消滅



日本の危機言語



### トマ・ペラルール

日本学術振興会外国人特別研究員  
(京都大学)  
EHESS (社会科学高等研究院、  
フランス・パリ) 大学修士  
博士 (言語科学)  
専門は記述言語学、歴史比較言語学

語も「訛っている」ところがたくさんあります。この後、例を紹介しようと思います。共通語も元々東京方言に基づいて定められたものなので、共通語も結局、一方言だということを忘れてはい

の危機に瀕している言語がいくつもあることを認定しました。アイヌ語、琉球列島のいくつものことば、八丈島のことばが取り上げられましたが、それに小笠原諸島で話されていることばも加えることができると思います。

ユネスコはそれを日本語とは異なる個別の言語と認識しており、私もそれが正しいと思います。方言と言語の区別は簡単な問題ではありませんが、ことばが隣同士で通じない場合は方言ではなく別の言語と考えるのが普通です。先程の狩俣先生のお話にもあったように、琉球列島の中にお互いことばが通じない島があるので、そこに複数の言語が存在することを認めたほうがよいでしょう。

方言や地域のことばに関しては意識の問題があつて、今は地域の伝統文化やことばが見直されつつあるものの、まだ日本が一文化・一民族・一言語の国だという考え方が根強く、多様性そのものが否定されることもあります。また、方言が「汚い・正しくない・訛っている」という考え方も未だに根強いです。それはまったくの誤解であつて、共通語が方言より優れているということはありません。東北の方言がよく「汚い」と言われますが、私の耳には共通語より東北弁のほうがきれいに聞こえます。それに共通



琉球列島

### 大神島のことば

私には琉球列島のことばを中心に研究していますが、狩俣先生のお話にあつたように、琉球列島は北琉球と南琉球に分かれ、北は奄美・沖縄、南は宮古・八重山・与那国からなっています。明治までは独立した琉球王国という別の国に属していました。日本とはそれほど交流がなかったため、本土と大きく異なる文化とことばがそこで発達してきました。特にことばは日本の中でバラエティが最もある地域です。

私は二〇〇七年から宮古諸島の一つである大神島のことばを調査してきました。大神島は周囲が2kmほどのとても小さな島です。過疎化が非常に進んでおり、現在はたぶん30人もいないと思います。そのほとんどが高齢者で、おそらく平均年齢が七十歳以上だ

と思います。

大神島は宮古島から1日5便のフェリーで、約10分で辿り着きますが、島には泊まるところがありません。店も、民家の中に日用品が少し置いてあるという小さな商店しかありません。戦後までは大神島はとても貧しく、高齢者によるとまるで発展途上国のようなだったそうです。電気や水道などの設備は一九八〇年代に入ってからやっと完備されたそうです。

大神島の住民の間では、大神のことばしか使われていません。高齢者は小学校に入学してから初めて日本語を覚えたそうです。その親は日本語が一生まったくできなかったと言います。島を出た若い世代は、四十代ならだいたい伝統的な方言を話すことができますが、それより若い人たちはまったく話せません。

このように見ますと、大神方言はまだ生きていますが、話者が非常に少ない上に、子どもへの継承が今はなされていないので、

重大な消滅の危機に瀕しています。大神島の住民は方言がなくなること非常に悲しく思っているそうです。

### 〈大神島を訪れて〉

私は博士課程に入ったばかりの頃、琉球のことばに興味がありました。参考になるまったくした記述がなかなか見つからなかった。自分で現地調査を行って、それを記述することを決心しました。敢えて、報告が少なく、消滅しそうで、かつ調査しにくいと言われている大神方言という危機言語に挑戦することにしました。

最初はどこの方言を調査すればいいのかを狩俣先生に相談したら、「大神島は難しいからやめた方がよい」と言われましたが(笑)、私は頭が固いので結局それにしました。確かに色々難しかったですが、大神方言を選んだのは大正解でした。その調査によって得



大神島

られた成果は非常に大きかったです。二〇〇七年から何回も大神島を訪れて、長いときは三ヶ月ぐらい宮古本島で宿泊しながら、日帰りで通っていました。そうやって二〇〇九年に大神方言の発音と文法の全体像、それに歴史的な変化の記述を博士論文としてまとめました。

学問の面だけではなく、大神方言調査は私にとって大変良い人生の経験でもありました。食べるだけで精一杯だった戦前の時代から、テレビや携帯電話の時代への変遷を目撃した人たちと触れ合うことができ、また、貴重な戦争体験談なども聞かせていただいて、非常に良かったと思います。

調査が成功したのは現在八十八歳の方に出会えたことが非常に重要だったと思います。信頼関係を築き上げるのに時間をかけて慎重な態度を取ったことも大事だったと思います。実は、大神島



大神島を訪れて

また、できるだけ大神方言で話そうとしたことも非常に印象が良かったそうです。その方によると、今まで調べに来た人たちはことばが難しくすぐによめて帰ってしまった。私みたいにずっと通って、頑張つて覚えた人は今までいなかった。非常に喜ばれました。

調査している間に、

は「神秘の島」と言われており、神に関するタブーが非常に多いです。そのため民俗学的な調査が非常に難しいのです。部外者が神様のことやお祭りの内容を知ることが許されていないのです。見ることもできませんし、聞いても答えてくれません。下手に聞いてしまうと、時々「あなたはもう帰れ」と言われたりするそうです。私は旧暦のことをよく知らないのですが、間違えて旧暦のお正月に島に渡ったら、船から降りた途端に「帰りなさい」と言われました。

そういう話を以前から伺っていたので、最初は「神様」という単語などは調査しませんでした。また、大神島には入ってはいけないところがたくさんあります。神様がいるといわれている「ウタキ」という聖地がいくつかあります。それを聞いて、最初は一人で島を散歩することもありませんでした。



大神島での調査

大神方言の特徴と重要性といいますが、まずは先に話したように、ことばが全く通じません。共通語も、または沖縄本島の方言、八重山石垣島の方言もまったく通じません。宮古島の方言でしたらなんとかわかりますが、先ほどの菊さんの与論ことばは私も何もわかりませんでした。

表1に載せた単語をご覧になっていただきますと、どのくらい異なるかわかると思います。大神のことばは、左は音声表記をして、右はカナで表記しました。また後でお話ししますが、大神の方言にはカナでなかなか表記できない音、単語がたくさんあります。

大神方言は宮古の中でもかなり独特で、発音の特徴が目立ちます。その特徴は日本語だけではなく世界の諸言語から見ても非常に珍しいものです。狩俣先生のお話に

その方に一方的にお世話になって、長時間にわたってすごくつまらない、変な質問ばかりに答えていただいて、迷惑をかけているなど思っていました。しかしある日、調査の途中、「忘れかけている昔のことやことばを思い出して、とても楽しい」と言われて心が晴れました。

また、「自分にも方言を聞いてほしい」という方が現れて、それも私にとって非常に力になりました。いつもお世話になっていらっしゃる方の孫も私の調査風景を見て非常に方言に興味を持ちはじめました。外国の人が習いに來るほど方言に価値があることに目覚めたようです。そういう人が増えれば方言が生き残る可能性があると思います。

### 〈大神方言の特徴と重要性〉

もありましたが、子音が  $\text{p} \cdot \text{t} \cdot \text{k}$ 、 $\text{b} \cdot \text{d} \cdot \text{g}$ 、 $\text{m} \cdot \text{n} \cdot \text{ng}$  の9個しかありません。日本語の共通語や他の宮古方言はだいたい15個くらいはあるのですが、この方言には9個しかなく、おそらく日本列島の中で最も少ないと思います。それに「パ・タ・カ」と「バ・ダ・ガ」の区別がありません。濁音がこの方言にはなく、「開ける」も「上げる」も、両方とも「アキル」と言って、区別がありません。また珍しいのは子音の連続です。日本語にはなかなか子音の連続がありませんが、この方言にはたくさんあります。たとえば「土」のことを「mita」、「人」は「psu」、「おでこ」は「ftai」、「日」は「dskai」、「引く張る」は「sapsks」と言います。

もつとも珍しいのは次の特徴です。普通の言語では「ア・イ・ウ・エ・オ」などのような母音を中心に単語が構成されるのですが、大神方言はその原理に反します。母音がまったくない、また

表 1：大神方言の語彙

日本語	大神	日本語	大神
私	anu	妻	tuku
貴方	vva	疲れた	pukarikam
自分	tuu	西	iu
どこ	nta	頭	kanamaw
ここ	uma	首	nupui
同じ	junumunu	髪の毛	karaku
虹	timpav	卵	tunuka
父	ua	低い	pwtakam
兄	suta	座る	puw
子供	faa	怖がる	iv
男	pikitung		

は声帯を振動させて発音される音も一切ない単語があります。たとえば「おっぱい」のことは「kss」「櫛」は「tʃ」「作る」は「kʃ」と言います。これは非常に珍しい特徴で、私の知っている限りでは世界の中でこのような言語は他に2例しかなく、アジアでは他にあります。言語の一般理論にとっても非常に重要なことばなのです。

先ほど私はことばの歴史に興味があると言いましたが、この方言にも非常に古い特徴があって、いくつか紹介してみたいと思います。まず、ハ行が奈良時代と同じくパ行になっており、たとえば「花」のことを「パナ」と言います。これは非常に古い特徴で、共通語のほうが「訛っています」。また、「夢」のことばを奈良時代で

は「イメ」と言っていました。それは共通語などで「ユメ」に変わりました。大神島では「イミ」と言い、最初の音はずっと変わっていません。詳しいことを話しますと複雑になりますが、奈良時代では「息」の「キ」と「木」の「キ」は発音が違っていました。現代の日本語では同じ音ですが、大神方言では違います。「息」の方は「kʃs」「木」のほうは「kʃt」と言います。奈良時代の區別をしっかりと保っています。その他に奈良時代では既に消えていた、または消えかけていた特徴も保っています。

### ことばの多様性を守るために

#### 〈保存とは〉

では、このことばの多様性をどのようにすれば守れるのでしょうか。保存とはどういうことなのでしょう。ことばを化石化した形で博物館の中で文化遺産として保管することなのか。それとも生きたまま次世代へ継承できるように保護することなのか。それは根本的な問題ですが、私は次世代へ継承できるように生きたまま保護しないとあまり意味がないと思います。

今は地方のことばの研究が支援されており注目も浴びているものの、保護と継承に関しては積極的な政策がまだ取られていません。菊さんのように、地元でそういう活動も見られますが、大きな規模の政策はまだありません。しかし若い世代への継承が非常に重要で、若い人が方言を学習できる場所を作らないと、そのことばがそのまま消えていくことになってしまいます。

よく心配されるのは、子どもに方言を教えたなら共通語ができなくなるのではないかということです。それはまったくの誤解で、

人間にはことをいくつも覚えられる能力があります。実際、二ヶ国語、またはそれ以上話せる人がたくさんいます。また、世界の中に正式に複数の言語の使用を認めている国家もたくさんあります。たとえばカナダ、スイス、スペイン、インド、シンガポールなどが挙げられます。そのような多言語国家がたくさんあるの  
で、日本もそのような国になることも不可能ではありません。

### 〈保存の方法〉

保存の具体的な方法ですが、方言の保存または復興の活動は地元から発信しなければなりません。地方のことは、それを話している人と習いたい人の努力がなければ消滅してしまいます。そこで国または地方自治体の支援もなければかなり難しいと思います。

言語学者は「我々のことを救え」と一方的に言われても非常に困ります。専門の知識と技術を提供して保存の活動に協力することはできませんが、地元の人が熱心にその方言を守ろうとしない限りどうにもなりません。例えば菊さんのような方がいると非常によいと思います。

研究者はこのように保存活動に協力し、できるだけ地元への還元をしなければなりません、それは今まであまり考えられてきませんでした。たとえばNHKの『全国方言資料』という録音資料があつて、最近CD版も出ています。その中に大神島の録音が含まれており、もう亡くなった方々の声が聞けるのですが、大神の人に聞いてみたら、誰もその資料の存在を知らなかったそうです。その資料が地元で「還元」されるべきだと誰も思わなかったようですが、これは問題だと思えます。大神の人たちにその録音を聞かせたら、自分の親戚の声が聞こえて大変喜んでいました。

多くの場合、伝統的なことが話せるのは高齢者だけで、今記録しないと今後継承も研究も一切できなくなります。したがって、大至急、様々なジャンル（日常会話、昔話、歌）などの音声、映像、テキストを集めなければなりません。

その他に不可欠なのは、方言をそれぞれ個別に、包括的・体系的に記述した文法書です。今まではことばの全体像を明らかにしないまま、細かい部分を研究するのが主流でしたが、それではそのことばの全体の姿がわかりませんし、そのことばを学習することもまったくできません。琉球語が始まって今百年以上経っているのに、記述文法書がほとんどないということは我々言語学者の反省すべき問題だと思います。

ある方言学者が文法の完全な記述は3年や4年では絶対にできないと言っていますが、私はそのくらいの時間があれば、完全とは言えないかもしれませんが、十分立派な文法記述が書けると思います。

地域のことばが消滅してしまうのはどうしようもないと断定する人もいますが、確かに放っておいてしまえば、あと数十年または数年で日本の多様なことばは完全に姿を消してしまいます。しかし、今のうちに保存に全力を注げば生き残る可能性は十分あると私は信じています。今後とも琉球のことばの研究を続けて、保存・復興活動にできるだけ協力していきたいと思えます。ありがとうございます。（拍手）

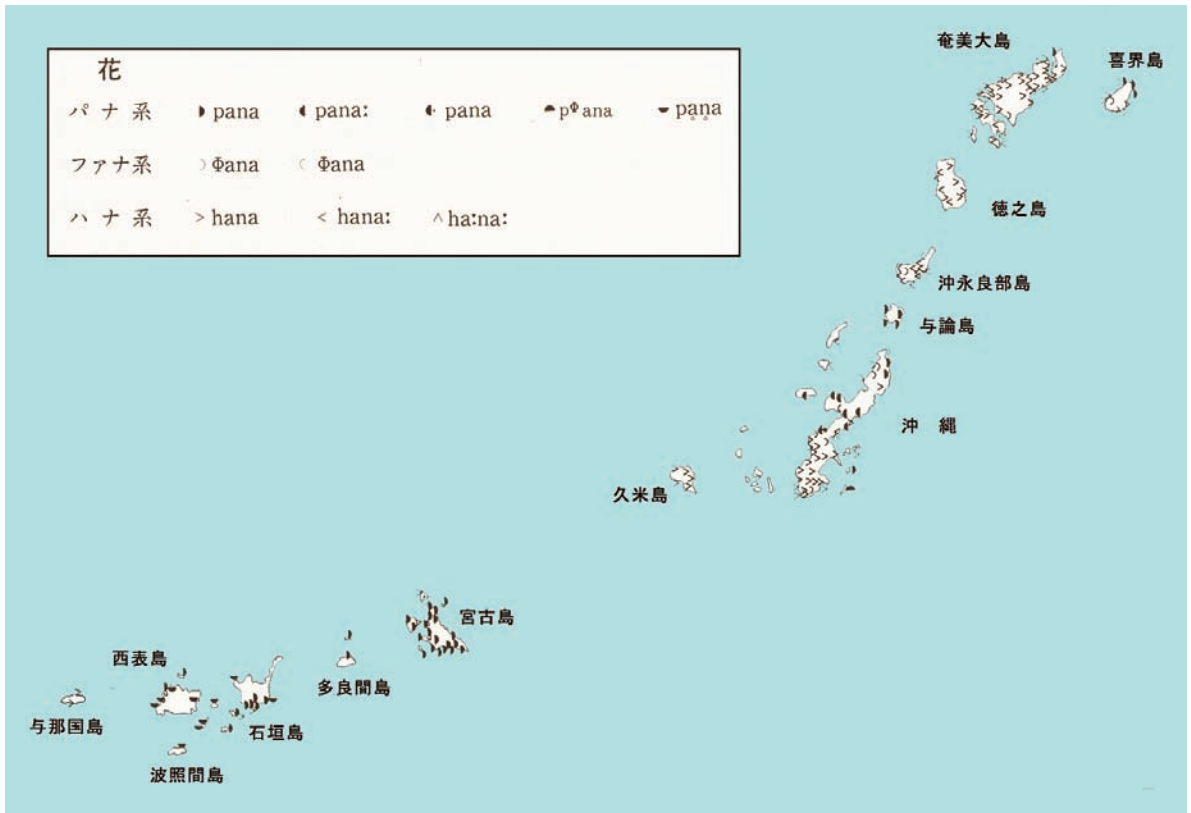


花

パナ系 ▶ pana ◀ pana: ◀ pana ◀ p<sup>h</sup>ana ◀ paŋa

ファナ系 ◯ fana ◯ fana

ハナ系 > hana < hana: ^ ha:na:



中本正智・中松竹雄 (1984) 「南島方言の概説」『講座方言学10 沖縄・奄美の方言』(国書刊行会)